

報告 環境保全活動団体会員にみる「環境倫理」意識

藤村コノエ^{*}、鹿島美緒子^{**}^{*}エコ企画、21世紀の環境と文明を考える会、^{**}エコ企画

Awareness of environmental ethics among members of a Japanese environmental NGO

Konoe FUJIMURA * Mioko KASHIMA **

^{*}Ecological Planning, Co. Japan Association of Environment and Society for the 21st Century^{**}Ecological Planning, Co.

(受付日 1995年6月21日・受理日 1995年11月16日)

1. はじめに

都市生活型環境問題や地球環境問題が深刻化するなか、わが国においても、環境教育・学習の重要性とともに、環境倫理の必要性が指摘されている。

そもそも環境倫理の概念は、欧米において生まれ発展してきたものである。そして、環境教育の国際的規範となったベオグラード宣言の中でも、「我々はまた、地球的視点からみた新しい倫理を強く求める。それは、個人の態度及び行動を支持し、また社会のあり方を正しく保ち、それによって生物圏における人間の場を調和あるものとするような倫理である」と述べられているように、既に様々な環境国際会議において、その重要性が指摘されてきた(阿部, 1991)。

一方、わが国において環境倫理が本格的に語られるようになったのは、ごく最近のことであり、その概念についても、いまだ確立されていないのが現状である。

しかし、人類の生存にもかわる今日的な環境問題の解決にあたっては、環境倫理の確立とその普及・定着は不可欠であり、地球的視野に立ちつつも、日本の風土、国民性、歴史的背景等を考慮した日本型環境倫理の確立が急がれるところである。

こうした状況を踏まえ、「21世紀の環境と文明

を考える会」(以下会とする)では、平成5年度より、環境事業団の地球環境基金の助成金交付を受け、会の中に環境倫理研究のためのプロジェクトチームを設置し、環境倫理についての調査研究を実施している。そして、この報告は、この調査研究の一環として会員に対して行ったアンケート結果をとりまとめたものである。

なお、会は「21世紀に向けての主要な環境問題が経済、社会、文化、ライフスタイルなど言わば文明のあり方と密接に関係しているとの認識のもと、環境と文明の関係について幅広く調査研究し、わが国のみならず世界の環境の質の維持、向上に資する新たな文明のあり方を探求する」ことを目的として設立された環境NGOであり、環境倫理の確立と普及を活動の主要な柱としている。

そして、環境倫理について社会的にあまり知られていない現状では、一般的に行われる無作為抽出のアンケートは成立しにくいことから、今回のアンケート調査は会の会員のみを対象として行った。

アンケート対象者である会員の構成概要は、職業としては会社員、公務員、教師・研究者、団体職員、無職等多種多様であり、年令も40代、50代、60代を中心に20代から70代まで幅広く、全国的に分布している。但し、環境関連の業務に従事している者が60%弱おり、男性会員が80%占める点が特色である。

(資料) 環境倫理に関するアンケート

問1. 「環境倫理」という言葉を聞いたことがありますか。

(はい いいえ)

現在「環境倫理」として、学者の間ではつぎのようなことがときどき言われています。これに関連して、以下の質問にお答えください。

・世代間倫理

現代の世代と同様に子や孫などの将来の世代にも生存する権利があり、現代の世代には次世代以降の将来の世代の生存可能性を確保する義務がある。

・自然の生存権

人間以外の生物にも生存する権利があり、人間の都合でそれらの権利を侵害することは許されない。

・地球全体主義

資源が有限である状況の中では、個人の自由よりも全体の生存が優先する。そこでは全ての人の生存する機会を均等に保障しなければならない。(加藤, 1991)

問2. 上に示した「世代間倫理」の考え方について、次の中からあなたにとって最も近いと思われるものを1つお選び下さい。

(全く賛成 賛成 どちらとも言えない 反対 全く反対 わからない)

問3. 上に示した「自然の生存権」の考え方について、次の中からあなたにとって最も近いと思われるものを1つお選び下さい。

(全く賛成 賛成 どちらとも言えない 反対 全く反対 わからない)

問4. 上に示した「地球全体主義」の考え方について、次の中からあなたにとって最も近いと思われるものを1つお選び下さい。

(全く賛成 賛成 どちらとも言えない 反対 全く反対 わからない)

問5. 「環境倫理」とは、現実の生活の具体的な状況において、「あれかこれか」という選択を迫られた際によって立つ「行動規範」とも考えられます。

(1) 「環境倫理」の内容については様々な考え方がありますが、地球環境問題が深刻化している今日、「環境倫理」というようなものが本当に必要とされているのでしょうか。該当するものを次から1つお選びください。

(是非とも必要 必要だと思う 必要ないと思う 全くナンセンス わからない)

(2) 「環境倫理」が上に述べたような「行動の規範」としてとしたら、「環境倫理」という言葉は適切と言えるでしょうか。次から該当するものを1つお選びください。

(適切である 良くも悪くもない 不適切である わからない)

問6. あなたにとって「環境倫理」とはどのようなものでしょうか。お考えやご意見を以下に自由に記入下さい。(裏面もご活用下さい)

2. 調査の概要

1) 調査目的

環境倫理についての会員の意識の実態を把握する

2) 調査方法

郵送によるアンケート調査、調査内容については(資料)参照のこと

3) 調査対象

「21世紀の環境と文明を考える会」会員957名

4) 調査期間

平成7年2月15日 ~ 平成7年3月15日

3. 結果

1) 回収率

発送数957に対して、回答数は286であり、回収率は29.9%であった。

年代別の回答数は、次のとおりである。なお、回答者の中の女性の比率が9%と低いことから、男女別の考察は行わないこととした。

表1 年代別の回答数

30未満	30代	40代	50代	60代	70代	不明	合計
9	24	53	73	49	17	61	286

2) 各設問への回答結果

(1) 問1の「環境倫理」という言葉を聞いたことがあるか

「環境倫理」という言葉を聞いたことがあるかどうかについてたずねたところ、「はい」と答えた者が66.1%、「いいえ」と答えた者が19.6%で、多くの者が聞いたことがあるとしている。この傾向は前述したように会の活動の一環として環境倫理があげられていることによるものと思われる。

なお「無回答」が14.3%となっているが、これはアンケート設計上のミスで、この設問があることに気づかず無記入が多かったためと思われる。

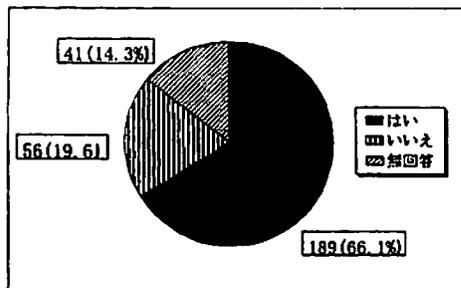


図1 「環境倫理」という言葉を聞いたことがあるか

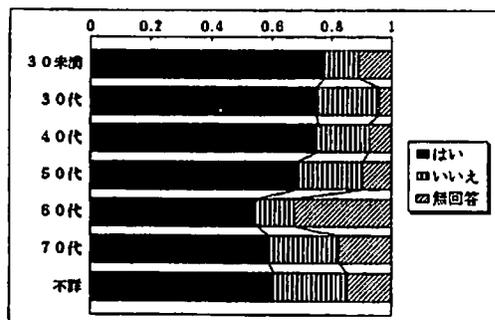


図2 「環境倫理」という言葉を聞いたことがあるか(年代別)

(2) 問2の「世代間倫理」の考え方についてどう思うか

「世代間倫理」の考え方についての賛否をたずねたところ、「全く賛成」と答えた者が59.8%、「賛成」と答えた者が31.5%をあわせて91.3%を占め、その他を大きく上回った。年代別にみても「全く賛成」と答えた者が各年代層とも最も高く60%前後おり、環境倫理の3つの考え方の中でも、特にこの考え方は多くの者が支持していることが伺える。

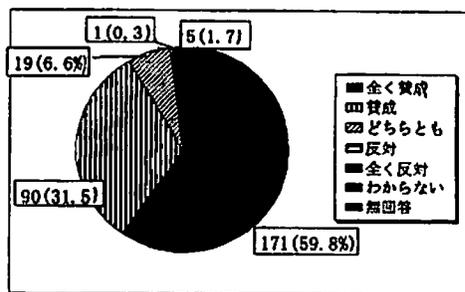


図3 「世代間倫理」について

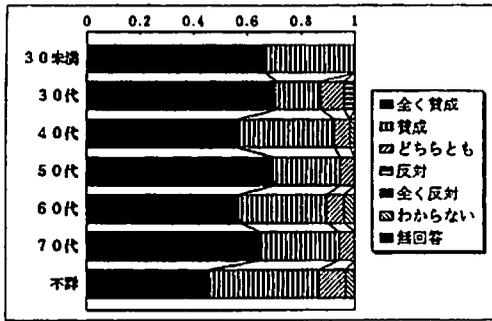


図4 「世代間倫理」について (年代別)

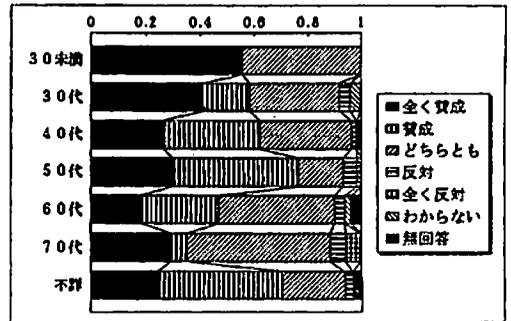


図6 「自然の生存権」について (年代別)

(3) 問3の「自然の生存権」についてどう思うか
 「自然の生存権」の考え方についての賛否をたずねたところ、「全く賛成」と答えた者が28.0%、「賛成」と答えた者が35.0%をあわせて63.0%となり、「どちらとも言えない」30.1%、「反対」3.8%、「全く反対」0.3%を大きく上回った。しかし、「賛成」とした者が「全く賛成」とした者を上回っていること、「全く賛成」とした者の総数が世代間倫理に比べて半数以下になっていること、「どちらとも言えない」と判断に困った者が30%いることについては、自然の生存権は大切ではあるが現実的には困難と考える者、あるいは自然の生存権を言葉としては理解できるが具体的な内容がイメージできない者がいるためと思われる。年代別にみると、年代ごとにかかなりのばらつきが見られる。

(4) 問4の「地球全体主義」についてどう思うか
 「地球全体主義」の考え方についての賛否をたずねたところ、「全く賛成」と答えた者が26.9%、「賛成」と答えた者が36.0%をあわせて62.9%となり、「どちらとも言えない」28.3%、「反対」3.1%、「全く反対」0.7%を大きく上回っている。しかし、これも「自然の生存権」同様、積極的な賛成とまではいかない「賛成」とした者が最も多いこと、「どちらとも言えない」と答えた者が30%近くいること、反対派が4%程度いることなどをみると、やはり現実的には難しい問題だと考えている者、あるいは具体的な内容がつかめない者がかなりいることが伺える。また、年代別には、どの年代も同じような回答傾向を示している。

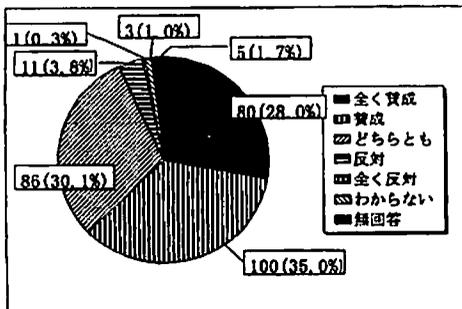


図5 「自然の生存権」について

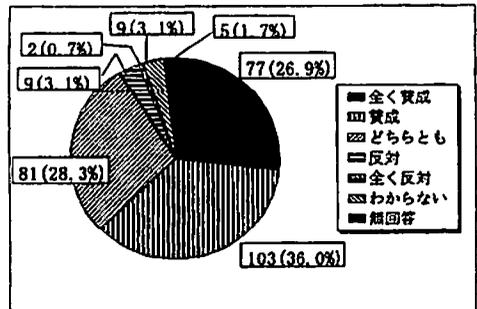


図7 「地球全体主義」について

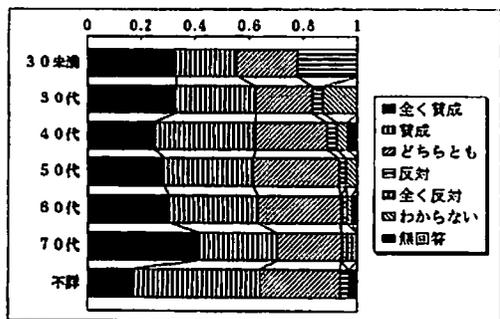


図8 「地球全体主義」について(年代別)

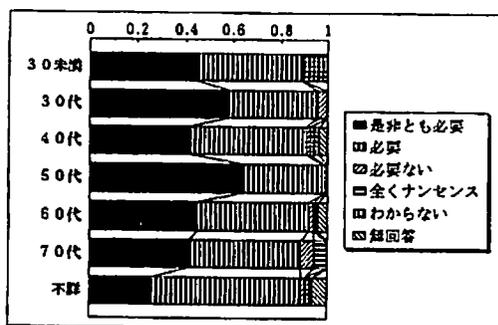


図10 「環境倫理」は必要か(年代別)

(5) 問5の「環境倫理」というようなものは本当に必要か。また、言葉は適切か

「環境倫理」の必要性についてたずねたところ、「是非とも必要」「必要」と答えた者がそれぞれ46.2%、46.5%となっており、年代別にみても、ほとんどの人が「環境倫理」は必要と考えていることが伺える。

しかし「環境倫理」という言葉が適切かどうかについては、「適切」と答えた者が36.0%、「よくも悪くも」が22.7%、「不適切」が13.6%、「わからない」が17.5%で、回答が分散しており、この傾向は年代別結果でも同様である。

「環境倫理」のような考え方は必要であるが、言葉そのものについては疑問を抱く者もかなりいることから、「環境倫理」の内容についてだけでなく、言葉そのものについても今後議論が必要なところであろう。

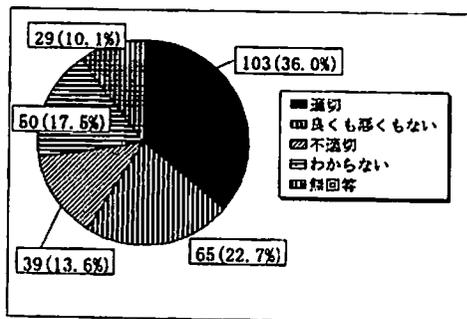


図11 「環境倫理」という言葉は適切か

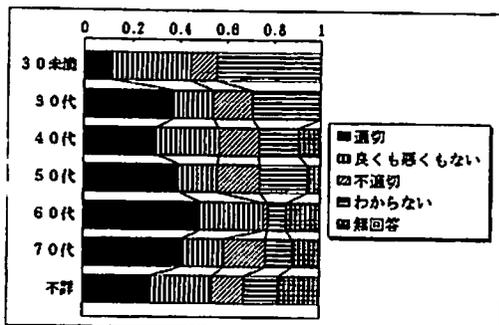


図12 「環境倫理」という言葉は適切か(年代別)

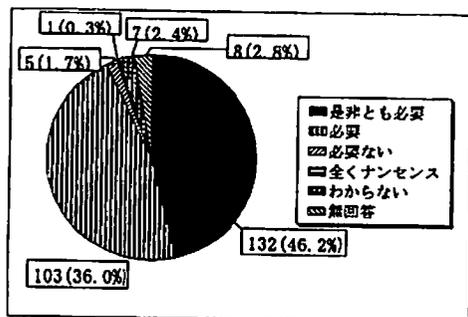


図9 「環境倫理」は必要か

4. 考察

問6では「あなたにとって環境倫理とはどのようなものか」というテーマを設定し、自由記述形式で回答を求めたところ、286名中229名の回答が得られた。ここでは、これら回答をいくつかのグループに分類し意見の集約を試みるとともに、問1~5までの回答と併せて若干の考察を行った。

1) 環境倫理という言葉のイメージについて

「固苦しい」を筆頭に、「漠然としている」「受

け入れにくい響きである」「きつすぎる」「おしつけがましい」「宗教的」「あるべきだのイメージが強く実行しにくい」「言葉の裏に為政者の政治的作為や一部の人のごうまんさを感じる」など、「環境倫理」という言葉を適切としない意見が多かった。反面、「耳障りがよい」「21世紀のキーワード」とする好意的意見や、「強さと切迫感を持つべき行動規範を語感の弱い環境倫理と呼ぶことは妥当でない」としてもっと厳しい語感を求める意見もわずかではあるがみられた。これら意見は問5の結果を裏付けるものであり、環境倫理の確立並びに普及には、名称そのものを再考することが必要と思われる。

2) 「世代間倫理」「自然の生存権」「地球全体主義」の3つの項目について

(1) 「世代間倫理」について

世代間倫理については、問2で多くの者が賛成していたことから、これに関する記述は比較的少なかった。しかし、将来の世代に遺産を残すのだから次世代にも負担の義務があつていいとする意見や人間のごうまんさを指摘する意見もあった。

(記述例)

- 地球は次世代からの借り物だから大切に扱うのは当然
- 現世代の義務だが、個人の自由が全く無くなると長続きしない
- この先3世代200年程度と限定して、現世代が今後200年の世代の生存に与えるマイナスの影響を極力排除していくという考え方で現実の行動規範となる倫理

(2) 自然の生存権について

自然の生存権に対しては、人間のごうまんさや身勝手さを指摘する意見が多く見られたが、その一方で現実的には人間優先に考えざるを得ないとする意見もかなりあった。また自然の生存権と人権を対立的に考えるのではなく連動的にとらえるべきとする意見や、生物の生存を犠牲にすべきでなく無条件にこの考え方に賛成とする意見もあった。

(記述例)

- 病原菌やゴキブリを守るのか、人の生存環境を守るために勝手に定義している
- 環境への配慮の根底には、人と人との共生の思想があり、単に自然や動物との共生を図ることではない
- 人間と共存しえない動物の個体には生存権は認めるべきではない。自然に対しては人間に管理権があり、現代の将来の人間に対しての有益・有害等の判断が自然の生存権に対して優越する規範と思う

(3) 「地球全体主義」について

「全体」という言葉に対する拒否的意見や環境ファシズムを懸念する意見がかなり見られ、環境倫理が個人の自由を束縛するような強制的なものではないとする意見が多かった。また、先進国のごうまんだとする意見や、多様な価値観・生き方のある世界でとても共有できる考えとは思わないとする意見もあった。

(記述例)

- 各々が持つ価値観も均等ではなく強引に一部の人の考えで均等にすることの方が問題
- 社会構成全体の欲望や自由を制限することを予定した考え方である
- 自由経済そのものの変革の必要性が出てくる

(4) 3つの考え方に対する比較

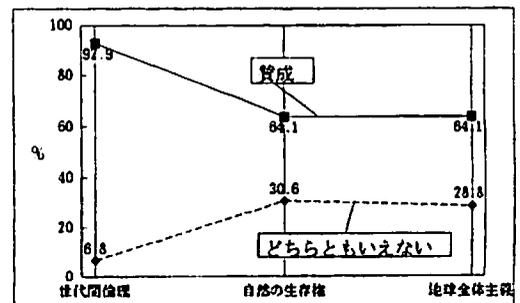


図1 3 3つの考え方に対する「賛成」と「どちらとも言えない」の比率

3つの考え方のうち、「世代間倫理」については圧倒的に賛成派が多いのに比べ、「自然の生存権」「地球全体主義」については賛成派がともに64%、どちらとも言えないとする意見が30

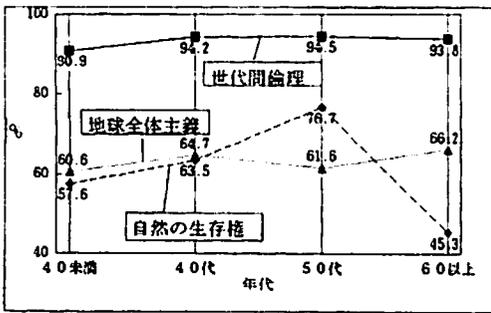


図14 年代別にみる「賛成」率の相違

%前後いる。これは、「世代間倫理」はまさに個人に直接関わる問題であるのに対して、他の2つは自分とは直接関わりのない他の地域のこと、他の生物のことであるとする発想がその根底にあるように思われる。

また、3つの考え方に対する年代別回答を見ると、「世代間倫理」「地球全体主義」では年代間の相違があまり見られなかったのに対し、「自然の生存権」については世代によってかなり考え方が異なっていることがわかる。特に、経済社会の中心的立場にあり最も現実的な考え方をとする年代であると一般的には言われる50代で、賛成派が最も多いことは注目すべき点である。この回答が、持続可能な開発の考え方のもと人類の存続のためには生態系の維持が不可欠であることを正しく認識した上での回答なのか、自然の中での原体験を持つ年代として真に自然の大切さを理解した上での回答なのか、その真意については追跡調査が必要と考える。一方、60代以上で賛成派が最も少なく、どちらとも言えないとする回答が最も多いことも(図6より)注目すべき傾向であるが、この結果については、様々な人生経験の中でこの考え方を自らの生活と考え併せてみた場合、やはり現実的には難しいことを実感しての回答と思われる、納得のいく結果といえる。40代から50代、そして60代にいたる著しい変化が「自然の生存権」についてのみ見られた原因をどう考えるかは今後の課題であるが、持続可能な開発についての認識度の違

い、自然の中での原体験の有無、余命時間の長短とその期間の生き方(現実的に生きるか、後世を考え理想実現のために生きるか等)の違いなども、その一因ではないかと考えられる。

3) 環境倫理とは何かについて

環境倫理のとらえ方として、①人と環境、人と自然との関係で考える意見、②個々の人間の価値観や行動規範として考える意見、③社会とのかかわりで考える意見の3つに大別された。特に②に関連して個人的な行動規範であり外からの規範ではないとする意見と、③に関連して環境倫理を個人的なものとしてだけでなく社会的なものとして考えるべきであり、社会制度、経済システム等を考慮すべきとする相対する傾向の意見がほぼ半々ずつあった。また、環境倫理を哲学、学問とする意見にくらべ、実践こそが重要であり具体的な行動基準としてのガイドライン・指針としてとらえるべきとする意見が多かった。こうしたことから、環境倫理の内容についてだけでなく、その対象や位置づけなど最も基本的な部分から議論を始める必要があろう。

(記述例)

- 自然環境と人間にとって快適な環境を両立させるかを考える上での拠り所となるもの
- 効率性、利便性、物質的豊かさの他に適切な人生の目的を見いだすこと
- 基本的には人類の普遍的な行動規範の一つであるべき
- 人類にとって新しい規範
- 人が真に求めるものは、共存、自由、平和、永続、調和であり、それを包括するもの
- 経済社会システムやライフスタイルの変革のための人間の行動のあり方にさかのぼった原理

4) 「倫理」と「環境倫理」について

「環境倫理」は一般的な「倫理」とかわりなく、特別に考える必要はないとする意見や個人的な行動規範であり、外からの規範ではないとする意見もかなりあった。これは上記②と関連する意見である。その一方で、個人の環境倫理と社会の環境倫理を区別して考えるべきとする意見もかなりあ

た。

(記述例)

- 世の中の全ての行動に通じる「倫理」の確立が必要
- 人が充実した幸福な人生を送るために必要な行動規範。国家や社会から押しつけられるべきものではない
- 倫理は現代社会のためのもの、環境倫理は将来の社会のためのもの

5) 社会との関係、解決策について

環境倫理を個人的なものとしてだけでなく、社会的なものとして考えるべきとする意見の中には、特に、社会制度、経済システムを考慮した環境倫理、またそれに基づく具体的な行動基準を求める意見もかなりあった。その一方で一律に強制的におしつけるのではなく、あくまで方向性を示すものであるべきとする意見もあった。また環境倫理は人口問題抜きには考えられない、この3要素に人口問題を追加すべきとする意見もみられた。

(記述例)

- 個人に頼るだけでは駄目。価格体系、税体系の改革を通じて消費生活からの転換を考えるべき
- 教育と法的規制で対応していくべき
- 企業、政府などの社会の倫理との関係を曖昧にしたままの議論は疑問

6) 環境教育との関係について

環境倫理を環境教育との関係でみる意見もかなりあり、特に基本的な思想教育こそが環境倫理であり家庭でのしつけや学校での道德教育の必要性を指摘する意見、理性のみに訴えても苦痛であり自然とのふれあいにより感性を育てていくことが大切とする意見が多かった。また、環境倫理は全て環境教育の中に含まれるものであり「環境倫理」という言葉は不要とする意見もあった。いずれにしても環境倫理と環境教育は密接なつながりを持つものであり、環境倫理の確立・実践のために、具体的に環境教育をどう行っていくかが今後の課題であろう。

(記述例)

- 自然と触れ合える生活体験が持てる社会環境

が重要

- 身近な生活から環境にやさしい行動を実行すること
- 自ら欲望をコントロールできる自律的な人間育成を考えたい

5. おわりに

ここ数年、環境倫理という言葉が盛んに使われるようになったが、この調査を通じて、環境倫理の必要性については多くの人が賛同しているものの、その概念、内容、名称、進め方等についての認識は多様であり、画一的なものはないことが明らかになった。

しかし、その中にも環境倫理確立のためのいくつかの方向性が述べられており、解決すべき課題もいくつか浮かび上がった。すなわち、

- 環境倫理は個人的な行動規範なのか、社会的規範なのか、またその両方があるのか
 - 個人的な規範とした場合、それを確立するためにどのような環境教育が必要か
 - 社会的な規範とした場合、社会経済システムとの関係をどう考え組み込んでいくか またそれを社会全体に強いることは適切か、その場合の環境教育はどうあるべきか
 - 環境倫理を個人的なものとするのか、社会的なものとするのか、それと両方とも考えた場合、それぞれの内容をどう考えどう関連性を持たせるか、また個人や社会の中でどう定着させていくのか
 - 現在環境倫理の3つの柱としてあげられている「世代間倫理」「自然の生存権」「地球全体主義」は本当に適切か、特に「世代間倫理」の世代をどのあたりまでと考えるのか、「自然の生存権」については現実的な問題として人間主体に考えざるを得ないのではないのか。「地球全体主義」について、多様な価値観の存在する国家間で果して共有できる考え方なのか。またこれ以外の柱(例えば人口問題など)は必要ないのか
 - 環境倫理という呼び名は適切か、不適切だとするとどのような名称が適切か 等
- これらの課題はいずれもかなりの難問であり、

一つひとつを明確にし社会的合意を形成していくことは容易ではないと思われる。しかし、例えば世代間倫理についてはかなりの合意が得られていることから、これに関して具体的な行動規範を形成していくなど、可能な部分からの議論を積み重ね、一つひとつを明確にしていく以外に方法はないように思う。

21世紀に向けて、多様な価値観の存在する地球上で、一人ひとりの市民や国家が互いの立場、価値観を尊重しつつも、地球市民としての、あるいは地球共同体としての一定のルール（環境倫理のようなもの）をつくっていくことは大切なことであり、早急に求められているものである。

こうした状況を踏まえ、環境教育に関わる者として、環境倫理の確立・普及・実行の全ての過程における環境教育の役割を認識するとともに、環境倫理を環境や教育に関わる人達だけでなく、宗

教界、政界、経済産業界、さらにはごく一般の多くの市民を巻き込んだ社会的な議論にしていくことが、まずは必要ではないかと思う。

謝辞

報告のとりまとめに際しては、21世紀の環境と文明を考える会代表加藤三郎氏、並びに同理事鈴木猛氏に丁寧なご指導を頂いた。また粗稿を読んでもいただき、的確なご助言も頂いた。この紙面を併りて深く感謝する次第である。

参考・引用文献

- 阿部治（1991）欧米における環境倫理の系譜，日本科学教育学会第15回年会，pp.143
加藤尚武（1991）環境倫理学のすすめ，丸善ライブラリー